

備前市の文化財

BIZEN CULTURAL ASSETS 2012



備前市教育委員会

きゅうしずたにがつこうこうどう つけたり へきしよ・まるがわら

旧閑谷学校講堂 附 壁書・丸瓦

国 昭和13年7月4日 備前市閑谷



JR山陽本線吉永駅
車約5分



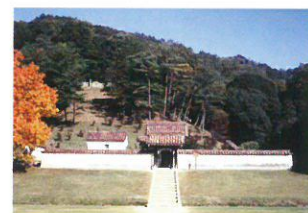
元禄14年(1701)に完成した閑谷学校の中心
的建物で、学校建築では唯一の国宝。桁行七
間(約19.4m)、梁間六間(約15.6m)、一重、入
母屋造。屋根は鍛(しころ)葺きで、柿(こけら)
葺きの上に板葺きを被せ、更に備前焼の瓦を
のせた三重構造。四面とも中央の柱間には頑
丈な棧唐戸を建てつけ、他の柱間には火灯窓
を配している。内室はケヤキの丸柱で、内外
室内木部は全て漆塗りで仕上げている。正面
に掲げられている「定」(壁書)と、元禄13年
(1700)銘の丸瓦も国宝に指定されている。

4

しずたにじんじや (きゅうしずたにがつこうほうれつし)

閑谷神社(旧閑谷学校芳烈祠)

国 昭和13年7月4日 備前市閑谷



JR山陽本線吉永駅
車約5分



学校創始者池田光政の御霊を祀る建物で、貞享
3年(1686)に建立された。江戸時代はずっと「芳
烈祠」と呼ばれてきたが、明治8年(1875)神社格
付されて「閑谷神社」と改称した。周囲を練堀で
囲み、中門をくぐると拝殿、幣殿、本殿と続き、
西側に神庫(しんこ)、繫牲石がある。いずれも屋
根は備前焼の本瓦葺で、鬼板や軒先丸瓦には泊り
揚羽蝶紋が焼き締められている。内陣には光政の
衣冠束帯姿の金銅座像が祭られている。儒学を重
んじ、孔子への敬意を表すため、聖廟の東に一段
低く、建物も控えめにつくられた。

2

きゅうしずたにがつこうせいびょう つけたり せいがん・きゅうねい・いしぼし

旧閑谷学校聖廟 附 聖龜・左右練堀・石橋

国 昭和13年7月4日 備前市閑谷



JR山陽本線吉永駅
車約5分



聖廟は儒学の祖孔子を祀る御霊屋で孔子廟とも
いわれ、貞享元年(1684)に建立された。

「芳烈祠」に対して「西御堂」とも呼ばれる。
周囲を練堀で囲み、外門をくぐると、中庭(ちゅ
うてい)、東西階、大成殿と続き、西側に文庫、厨
屋(くりや)、繫牲石(けいせいせき)がある。各建物
の屋根は備前焼の本瓦葺。内部には八角形の須弥
壇の上に聖龜(厨子)が置かれ、その中に金銅製の
孔子像が祀られている。

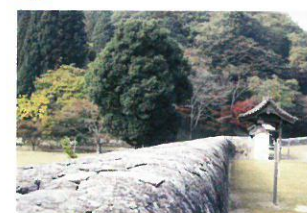
一番高い所にあり、正面前に校門が配されるな
ど、精神的中心をなす建物である。

3

きゅうしずたにがつこうせきへい つけたり いんしつもん

旧閑谷学校石堀 附 飲室門

国 昭和13年7月4日 備前市閑谷



JR山陽本線吉永駅
車約5分



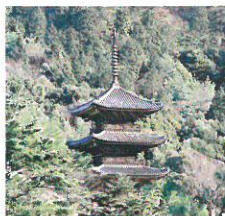
校門(鶴鳴門)の左右からおこり、学校全体
を囲む石築堀。元禄14年(1701)に完成した。
上端をかまぼこ型に整形した南側の石組は、
幅約1.8m、高さ約2.1mであるが、椿山に接
する東側や飲室門以西はかなり低い石組
となっている。山手の北側と西の半分は打
ち込み接ぎの石組である。延長約765mで、
かまぼこ型石堀は基礎に捨て石を置き、流
紋岩質の切石を両面から合端を合わせて積み
上げ、裏込石には同質の割栗石を詰めて
中庭の自然排水を可能にしている。

5

おたきさんふくしゅうのとう

大滝山三重塔

国 大正15年4月19日 備前市大内

JR赤穂線香登駅
車約10分

方三間本瓦葺の三重塔で、塔頂に鉄製の相輪(約6.1m)を立て、総高約19.7m。嘉吉元年(1441)に足利義教が建立したと伝えられる。

軸部の柱は総門柱で、軒は出を深くし、二重垂木(しげだるき)にしてある。和様の斗拱(ときょう)を三手先(みてさき)に組み尾垂木を出す。四隅に青銅の風鐸を吊り、中備(なかぞなえ)には形のよい蓑束(みのづか)を用いている。内部には来迎柱をたて内外陣を分ける。中央の須弥壇に置かれている厨子の絵様や塔全体の姿に室町時代の特徴がよく表れている。

1

おたきさんふくしゅうじにおうもん

大滝山福生寺仁王門

県 平成18年3月17日 備前市大内

JR赤穂線香登駅
車約10分

寺伝によると、応永4年(1397)足利義満が建立したと伝えられる。康正元年(1455)赤松・山名の兵火に遭うが三重塔とともに焼け残った。施主札や材から元和9年(1623)信徒により改築されたとみられる。

三間一戸の八脚門で正面三間、側面二間、梁間二間、中央通路幅一間、単層。屋根は入母屋造、本瓦葺。棟高約5.2m。左右一間を前後室に分け金剛垣を設け、前室は土間で、後室に金剛力士像が配されている。

18

おたきさんふくしゅうじほんどう

大滝山福生寺本堂

県 平成15年3月11日 備前市大内

JR赤穂線香登駅
車約10分

大滝山福生寺は、寺伝によると天平勝宝年間(749~757)に鑑真和尚が開基し、後に報恩大師の備前四十八ヶ寺の一つに加えられた。縁起によると本堂は足利義満が応永年間(1394~1428)に建立したが、康正元年(1454)兵火により焼失し、明応3年(1494)再建されたという。現在の本堂は天和2年(1682)に再建されたもの。桁行五間、梁間五間、向拝一間。屋根は入母屋造、本瓦葺。棟高約9.4m。近世的な特徴を備えた中世仏堂形式で、内外陣、脇陣を高敷居で結界し、内外陣境に欄間彫刻を施すなどの特質をもつ。

17

おたきさんふくしゅうじだいしどう

大滝山福生寺大師堂

市 平成15年4月10日 備前市大内

JR赤穂線香登駅
車約10分

現在の大師堂は、古文書によると天和2年(1682)に本堂とともに再建されたもの。

方三間方形造で、本瓦葺。棟高約4.4m。屋根の頂部に露盤宝珠を飾り、なだらかな勾配をもった隅棟と真反りの曲線と深い軒の出をもった軒庇によって構成され、堂内に大型の宮殿型厨子を置く。

日本の伝統を重視する新和様で統一され、本堂とともに再建年代がわかる建造物として評価される。

53

しんこうじほんどうつけたり むなふだ

真光寺本堂 附 棟札

国 昭和28年11月14日 備前市西片上

JR赤穂線西片上駅
徒歩約5分

御滝山真光寺は寺伝によると、天平年間(729~749)に報恩大師が創建し、備前四十八ヶ寺の一つである。

桁行五間、梁間五間の単層。屋根は入母屋造、本瓦葺。応永年間(1394~1428)の再建当時は三間堂だったが、永正13年(1516)に五間堂に大改修された。堂内の内外陣の境には菱欄間をはめ込み、格子の結界(境)を設けるなど、典型的な密教本堂の形式である。外陣の大虹梁(だいこうりょう)に刻まれた袖切眉(そできりまゆ)、錫杖彫(しゃくじょうぼり)などは室町時代の特徴を表し、須弥壇と厨子には桃山様式の豪華な彩色彫刻が施されている。

7

おたきさんしんこうじにおうもん

御滝山真光寺仁王門

市 昭和46年10月6日 備前市西片上

JR赤穂線西片上駅
徒歩約5分

文禄年中(1592~1596)に十萬屋良喜の寄進で建立し、金剛力士2体を安置した。現在の門は宝永8年(1711)に再建されたもの。

三間一戸の八脚楼門で、正面三間、側面二間中央通路幅一間。屋根は二重で入母屋造、本瓦葺。檼、檣などの良材が用いられ、軒、腰組ともに三手先斗拱(みてさきときょう)を用いており、豪壮で雄大な外観にこの時代の特徴がよく表れている。

43

しんこうじさんじゅうのとうつけたり むなふだ

真光寺三重塔 附 棟札

国 昭和28年11月14日 備前市西片上

JR赤穂線西片上駅
徒歩約5分

方三間本瓦葺の三重塔で、塔頂に青銅製の相輪(約5.9m)を立て、総高約18.2m。塔の建立時期は明らかではないが、慶長18年(1613)に邑久郡牛窓町(現瀬戸内市)蓮花頂寺から移築したと伝えられる。

初重の各面中央の蓑股(かえるまた)や、木鼻、間斗束(けんとうづか)などに室町時代の特徴がよく表れている。

内部には2本の来迎柱で来迎壁をつくり、須弥壇には、備前市八木山の仏師八木浄慶(桃山時代)が三石のろう石で彫った大日如来坐像が安置されている。

6

おたきさんしんこうじけどういんせいもん

御滝山真光寺花蔵院正門

市 昭和46年10月6日 備前市西片上

JR赤穂線西片上駅
徒歩約5分

真光寺花蔵院は、真光寺中興の祖良宗から4代目、宥宗により開山された。正門は元禄14年(1701)、当時の片上町奉行大橋茂右衛門の寄進により建立された。

武家門風の一間一戸の四脚門。屋根は切妻造、本瓦葺。破風(はふ)の懸魚(けぎょ)や欄間の彫刻など、江戸時代の様式をよく表している。

44

につこうさんしょうらくじやくでんおよびげんかん

日光山正楽寺客殿及び玄関

市 昭和57年5月26日 備前市蕃山



JR赤穂線伊里駅
車約5分



寺伝によると、正徳5年(1715)の建築。

桁行七間、梁間五間半。周囲に縁側、東南部に釣屋をつけ庫裏(くり)に接している。屋根は入母屋造、本瓦葺。妻飾りは二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりょうたいへいづか)で、破風(はふ)に三つの花懸魚(はなけぎょ)を吊っている。室内は書院造の形式をもち開放的である。玄関は唐様破風の曲線が美しく、兎の毛通し、式台、引戸も格調高い作りで、全体に美しい客殿である。

47

につこうさんしょうらくじほんどう

日光山正楽寺本堂

市 昭和62年7月28日 備前市蕃山



JR赤穂線伊里駅
車約5分



日光山正楽寺は寺縁起によると、天平勝宝年間(749～757)に報恩大師が創建し、備前四十八ヶ寺の一つである。

現在の本堂は、鬼瓦銘から正徳元年(1711)の建築。

桁行五間、梁間五間。屋根は入母屋造、本瓦葺。破風(はふ)に鯉付蕪懸魚(ひれつきかぶらけぎょ)を吊っている。

手挟(たばさみ)や虹梁(こうりょう)の彫刻、絵様は躍動的である。また内外陣の間仕切りや、格子、障子などに古い様式を残すなど、改築の少ない優れた建造物である。

49

につこうさんしょうらくじしょうろう

日光山正楽寺鐘楼

市 昭和57年5月26日 備前市蕃山



JR赤穂線伊里駅
車約5分



寺伝によると、正徳5年(1715)の建築。

桁行三間、梁間二間。屋根は入母屋造、本瓦葺。擬宝珠高欄(ぎぼしこうらん)の回縁をつけ、下部には袴腰をつけている。

妻飾りは笈形付大瓶束(おいがたつきたいへいづか)で、破風(はふ)に形のよい懸魚(けぎょ)を吊っている。軸部の構造は豪快だが、破風(はふ)、連子窓、蕪股(かえるまた)などに美しい彫刻が施されており、全体の構成が整った華麗な建造物である。

48

につこうさんしょうらくじさんもんつけたりぶんかじゅうよねんむなふだ

日光山正楽寺山門附文化十四年棟札

県 平成29年3月7日 備前市蕃山(千手院)



JR赤穂線伊里駅
車約5分



棟札から文化14年(1817)の建築。

三間一戸の八脚楼門で二階建て校門。一、二階とも正面三間、側面二間。棟高約8.4m、軒高約6.2m、二階床高約4.1mで、楼門としては大形のものである。

屋根は入母屋造、本瓦葺。表裏に軒唐破風をつけ、二階には禅宗様高欄をもった回縁をつけている。軒裏、支輪を板張りとし、雲と波の彫刻を施し、軒下の組物には雲形斗拱(ときょう)を使用している。金刀比羅宮旭社に類例を見ることができる。

52

おぼたさんしょうほうじほんどう

小幡山長法寺本堂

市 昭和62年7月28日 備前市伊部



JR赤穂線伊部駅
車約5分



小幡山長法寺は寺縁起によると、天平勝宝年間(749～757)に鑑真和上が開基し、後に報恩大師の備前四十八ヶ寺の一つに加えられた寺。鬼瓦銘から本堂は安永5年(1776)の建築だが、「小幡山長法寺本堂積書」では宝暦2年(1752)新初、明和7年(1770)上棟となっている。桁行五間、梁間五間。屋根は入母屋造、本瓦葺。妻飾りは二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりょうたいへいづか)で、虹梁間に蕪股(かえるまた)を飾り、破風に鯉付蕪懸魚(ひれつきかぶらけぎょ)を吊っている。台輪、斗拱(ときょう)、柱等に禅宗様が見られる。

50

あまつじんじゃほんでん

天津神社本殿

市 昭和56年7月24日 備前市伊部



JR赤穂線伊部駅
徒歩約10分



天津神社は由緒書によると、応永18年(1411)以前にはあり、御神託により、天正7年(1579)に浦伊部から現在地に遷宮された。本殿は棟札によると延宝6年(1678)に建築されたもの。

一間社流造で、屋根は檜皮葺(ひわだぶき)(現在銅版葺)。蕪股(かえるまた)、虹梁(こうりょう)、木鼻(きばな)の繰形や、懸魚(けぎょ)の彫りもすばらしく、建物全体の構成も見事である。

<祭神>少彦名命、菅原道真、大己貴命

45

さいねんじおもてもん

西念寺表門

市 平成11年3月11日 備前市日生町日生



JR赤穂線日生駅
車約5分



寺伝によると、寛永寛文年間(1630～1673)に建築された岡山藩家老土倉氏の陣屋門を、明治の廃藩置県で所領を失った土倉氏から譲り受け、明治7年(1874)に和氣郡佐伯町米沢から移築したもの。

三間一戸の棟門。屋根は切妻造、本瓦葺。高さ5.37m 幅6.33m。

築地塀の門に対する調和が見事であり、その外観は江戸時代の特徴である蕪股(かえるまた)、斗拱(ときょう)などを使用せず、重厚で高い格調に仕上げられている。

51

おおうちじんじゃほんでん

大内神社本殿

市 昭和56年7月24日 備前市香登本



JR赤穂線香登駅
車約5分



大内神社は備前国128社神名帳に記載されている古社である。本殿は棟札から元禄16年(1703)に建築されたもの。

三間社流造。屋根は檜皮葺(ひわだぶき)。2本の丸柱を建て内々陣をつくり、平面は中世的な性格をもつ。妻飾りは二重虹梁大瓶束(にじゅうこうりょうたいへいづか)、蕪股(かえるまた)、支輪(しりん)を用い、均整のとれた美しい構成になっている。

46

こうねじんじゃほんでん

神根神社本殿

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町神根本

JR山陽本線吉永駅
車約15分

神根神社がいつできたかは不明であるが、延長5年(927)に延喜式神名帳に式内社として記載された古社である。現在の地に建てられたのは治安2年(1022)で、寛文10年(1670)岡山藩主池田光政により再建され、明治5年、郷社に指定された。本殿は基壇の上に東に面して立つ一間社流造。屋根は銅板葺(もとは檜皮葺(ひわだぶき)か)で、屋根と軸部は美しい調和を見せ、妻飾りは過度な装飾を施さず、全体に江戸時代初期の特徴がよく表れている。

<祭神>木花咲耶姫(このはなさくやひめ)

40

しょうほんじほんどう

松本寺本堂

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町南方

JR山陽本線吉永駅
車約5分

寺伝によると、天平元年(729)行基菩薩が創建し、天文12年(1543)(もしくは天文16年)に現在地に移転された。現在の本堂は、棟札から享保11年(1726)に再建されたもの。

正面三間、側面三間で、周囲に無高欄の回縁がある平入りの三間堂であったが、文化7年(1810)内陣の両側と背後に増築をし現在に至る。内外陣は鏡天井で、内陣柱上の組物は美しく、来迎柱上の唐様の木鼻、皿斗、斗拱(ときょう)は見事である。

41

てんぼうかま

天保窯

市 昭和46年10月6日 備前市伊部

JR赤穂線伊部駅
徒歩約10分

大窯の4分の1の十数日で焼成できる連房式登り窯で「融通窯」とも呼ばれる。

現存する窯は3基あった融通窯のうち、北大窯の南西側にあるもので、天保3年(1832)頃から昭和15年(1940)頃まで焼き継がれた。

長さ17.5m(推測長23m)、幅6m、高さ2~2.5m。築窯時には7室あったが、改修により8室となっている。小窯で焼くことで、経費の節減と品物の回転を早め、備前焼の窯としては画期的なものだった。

42

ちようほうじあみだによらいせきぶつ

長法寺阿弥陀如来石仏

市 昭和46年10月6日 備前市伊部

JR赤穂線伊部駅
車約5分

像高約60.6cm、台座高約22.7cmの花崗岩製阿弥陀如来坐像。作者、年代は不明だが、肉厚で、格狭間や蓮華座の彫りから、室町時代かそれ以前とみられる。

平安時代末期から鎌倉時代にかけて浄土念仏の思想が広まり、真言宗にも念仏聖が輩出した。彼らは全国に信仰を広め、人びとの救済に挺身し、布教先で阿弥陀像を彫り、寺を興し産業指導もした。この石仏はこうした聖たちの活動の広まりのなかで作られたものと思われる。

55

しょうほんじほうきよういんとう

松本寺宝篋印塔

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町南方

JR山陽本線吉永駅
車約5分

宝篋印塔は、もとは中に宝篋印陀羅尼経を納めた塔で、一般に方形の石を下から基壇・基礎・塔身・笠・相輪と積み上げ、笠の四隅に飾りの突起をつける。

松本寺宝篋印塔は基礎が低く、笠石の四隅突起が垂直に立てられ、室町時代中期頃に造立されたとみられる。一部が欠けているが、相輪が太く雄偉な姿の塔である。

54

おぼたさんちようほうじせきざうほうきよういんとう

小幡山長法寺石造宝篋印塔

市 平成12年3月1日 備前市伊部

JR赤穂線伊部駅
車約5分

宝篋印塔は、もとは中に宝篋印陀羅尼経を納めた塔で、一般に方形の石を下から基壇・基礎・塔身・笠・相輪と積み上げ、笠の四隅に飾りの突起をつける。

この塔は総高約2mで花崗岩製。相輪から基壇まで各部がそろい、塔身と基礎の四方に種子(しゅじ)、格狭間(こうざま)、反花座(かえりばなざ)を刻む。平成3年に印塔を修復し、最下部に石段を築いた。

南北朝時代のもので、当時の武将を供養したものと伝えられている。

60

せきざうほうきよういんとう

石造宝篋印塔

市 昭和46年10月6日 備前市麻宇那

JR赤穂線伊里駅
車約5分

宝篋印塔は、もとは中に宝篋印陀羅尼経を納めた塔で、一般に方形の石を下から基壇・基礎・塔身・笠・相輪と積み上げ、笠の四隅に飾りの突起をつける。

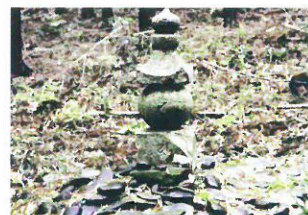
この塔は相輪部分が一部欠けており、伏鉢(ふせばち)まで約1.3m。笠の隅飾はわずかに外方に開き、塔身に四仏種子(しぶつしゅじ)、基礎に格狭間(こうざま)、反花座(かえりばなざ)を刻む。南北朝時代のもので、誰の供養塔か不明。格狭間の右に「新田新庄」、左に「麻野下村」と刻まれており、領地境に利用したものとみられる。

56

ごりんとう「いしこづめのかか」

五輪塔「石子詰の塚」

市 昭和52年3月31日 備前市吉永町加賀美

JR山陽本線吉永駅
車約30分

多数の河原石を低く積み上げた塚の中央にある花崗岩製の五輪石塔で、高さ約1m、修験者の墓と伝わる。火輪等の一部破損はあるが、地輪、水輪の四面に梵字が彫られ、鎌倉終わり頃~室町時代初め頃の作とみられる。

地元では「五輪さん」と呼ばれ、小石を持ち帰り痛いところをさすると治るといわれており、治ったら川原の石を1つ添えて2つにし、お礼参りをするのが習わしである。

57

倉吉の板碑

市 昭和62年3月26日 備前市吉永町福満

JR山陽本線吉永駅
車約5分

板碑とは鎌倉前期の石造供養塔で、宝篋印塔や五輪塔とならび、中世を通じてもっとも普遍的なものとなった。

この板碑は高さ約1.3m、幅約30cmの花崗岩製。頂上の山形が低く、左右へ緩やかに流れる。碑の上方中央に梵字が彫られ、下方中央に一行「文永□月□□」とあり、県下に残る板碑の中ではかなり古いものである。造立者や目的は不明だが、満願寺と深い関わりがあるとみられる。

58

絹本墨画白衣観音図

県 平成4年4月3日 備前市蕃山(正楽寺)

岡山県立博物館へ
寄託

白衣観音は観音菩薩が三十三身に現じて衆生を救う姿の一つである。

本図は縦95.8cm、横37.6cmの縦長の一幅の絹本に、補陀洛山の溪流に臨む岩上で、禅定印を結んで結跏趺坐している白衣観音の静かな威厳ある姿が水墨で描かれている。

観音像の背後に「金溪道人作」という文字が読み取れ、室町時代の作とみられる。

19

滝谷筆塚

市 平成9年12月8日 備前市吉永町多麻

JR山陽本線吉永駅
車約40分

手書き地蔵堂の境内にあり、大きな石像の筆を立て、根元に「手書地蔵尊」と書いた旗を持つ幼児の像を刻んでいる。「手書地蔵尊明治式拾八年参月式拾四日建立」の銘が入っており、習字の上達や成績の向上に霊験があるとされている。

幕末から明治にかけて、筆子たちが師匠から受けた恩に報い後世に伝えるため、各地に筆塚が建立されたが、県内にはあまりなく、特に幼児が筆を抱いている像は、全国的にも珍しい。

59

絹本著色十六羅漢像

県 平成13年3月23日 備前市伊部(長法寺)

岡山県立博物館へ
寄託

中国宋時代の羅漢図を模写したもので、縦131.4cm、横53.8cmの絹地の各幅に一尊者ずつ描いた16幅からなる。

寺伝によると、京都東山の泉涌寺の僧が建暦3年(1213)中国から持ち帰ったもので、後小松天皇(1377~1433)の病氣平癒を祈願した功により寄付されたもの。

画中に各尊者の居住と尊名が金泥で書かれており、制作年代は14世紀を下らないとみられる。

20

阿弥陀如来画像

市 昭和55年8月12日 備前市日生町寒河(西願寺)

JR赤穂線寒河駅
車約5分

本願寺絵表所制作の如来像掛軸。縦68cm、横30cm。

室町時代末期の仏画で、保存もよく補修も少なく、当時の特色をよく伝えており、寒河の歴史を表す貴重なものである。

裏書に「方便法身尊像、大谷本願寺積実如御印、文亀三年十二月六日 本願寺門徒備前和氣郡新田新庄寒河村 願主 祐西」とあり、西願寺開基祐西が、姫路龜山本徳寺の道場として開堂したとき、本願寺から下賜された本尊と伝えられる。

61

武元登々庵肖像画

市 昭和61年3月26日 備前市吉永町吉永中

備前市吉永美術館
所蔵

江戸後期の漢詩人、書家、蘭方医。明和4年(1767)~文化15年(1818)。名は正質、字は景文。通称は周平。行庵、泛庵などと号した。北方村(現吉永町岩崎)庄屋の和七郎の長男に生まれ、閑谷学校で学ぶ。家督を弟君立に譲り、各地を巡遊し蘭学を学ぶ。菅茶山、頼山陽など多くの文人、学者と交わった。漢詩論を書いた『古詩韻範(こしいんぱん)』、詩集『行庵詩草(こうあんしそう)』などの名著がある。肖像画は大西圭斎によって描かれている。

63

阿弥陀如来画像

市 昭和57年1月21日 備前市日生町日生(西念寺)

JR赤穂線日生駅
車約5分

本願寺絵表所制作の如来像掛軸。縦109.3cm、幅50.5cm。

室町時代末期の仏画で、保存もよく補修も少なく、当時の特色をよく伝えており、日生の歴史を表す貴重なものである。

裏書に「方便法身尊形 本願寺積顕如判万福寺門徒」とあり、当時赤穂万福寺に属していた日生門徒に顕如から下賜された本尊と伝えられる。

62

武元君立肖像画

市 昭和61年3月26日 備前市吉永町吉永中

備前市吉永美術館
所蔵

江戸後期の漢詩人、農民学者。明和7年(1770)~文政3年(1820)。名は正恒、字は北林または高林。通称は勇治。のち与兵衛、立平とも呼ばれた。登々庵の弟。兄と同じく閑谷学校で学び、24歳で江戸の昌平校に入るが、家督相続のため帰郷し、文化10年(1813)閑谷学校教授となる。著書に、新しい農業のあり方を書いた『観農策』、日本の歴史を書いた『史鑑』などがある。詩集『北林遺稿(ほくりんいこう)』は死後に出版された。肖像画の作者は不明。

64

もくどうしゃかによらいごどう

木造釈迦如来坐像

国 明治34年8月2日 備前市浦伊部(妙圀寺)

JR赤穂線伊部駅
車約10分

坐像底板の朱書銘から、延文3年(1358)運慶6代孫大仏師康俊の作であることがわかる。像高63.6cm。檜の寄木造。玉眼をはめ、体は金粉を用いた粉溜地(ふんだめじ)、納衣には卍崩しの切金(きりがね)を置き、胡粉(ごふん)盛り仕上げに色彩が施されている。頭部の肉髻(につけい)部は低く、粒の荒い螺髪(らぼつ)をつけ、禪定印(法界上印)を結ぶ宋風の仏像。

<非公開>

8

もくどうあみだによらいおびりょうきょうじぞう

木造阿弥陀如来及び両脇侍像

県 平成6年4月5日 備前市伊部(長法寺)

JR赤穂線伊部駅
車約5分

檜材の割刳造(わりはぎづくり)。像高は、中尊阿弥陀如来坐像が112.5cm、左脇侍観音菩薩立像が137.0cm、右脇侍勢至菩薩立像が134.5cm。

定朝様を引き、柔和で高い品格を有する優美平明な藤原和様の特徴をよく表しており、平安時代後期の作とみられる。

県下では中尊と両脇侍がそろっている現存唯一の三尊仏で、保存状態も極めてよい。

<御本尊・非公開>

21

もくどうやくしによらいごどう

木造薬師如来坐像

県 昭和34年9月15日 備前市吉永町南方(松本寺)

JR山陽本線吉永駅
車約5分

像高82.8cm、檜材の一木造、素地。定朝様の温和な姿の像で、平安時代後期の作とみられる。台座、光背は、安土桃山時代から江戸時代の後補、左掌の薬壺も後補である。

脇侍の日光・月光両菩薩像は、総高約40cmで、室町時代後期の作とみられる。

また厨子の両外壁には、中尊と同時代の作とみられる像高約36cmの薬師十二神将が安置されている。

<御本尊・非公開>

22

ともふやくしによらいごどう

友延薬師如来坐像

市 平成15年11月4日 備前市友延(友延薬師堂)

JR赤穂線伊里駅
車約5分

像高86.0cm、檜の寄木造。彫眼。蓮華台45.0cm。

平安時代末期から鎌倉時代の作とみられるが、頭部上の肉髻(につけい)部、表面の漆箔、裳先部などに後補がみられる。

温和、平明、優美の様式が一貫している藤原和様の仏像で、全体に上品な姿である。

また須弥壇の下両側に、像高160cmの四天王像が安置されている。

65

ぼんしょう

梵鐘

県 昭和34年3月27日 備前市浦伊部(妙圀寺)

JR赤穂線伊部駅
車約5分

総高81.8cm、口径48.4cm、重量106kgの和鐘。鎌倉時代末期の永仁6年(1298)に铸造された青銅製の鐘。銘から紀州の風森宮の鐘として铸造され、追銘によりその後貞和3年(1347)粉河寺別院遍照寺に移ったことがわかる。その後の記録はないが、紀州根来寺などに大量に備前焼の甕が搬出されていることから、交易によって妙圀寺に納められたものかと考えられる。小型だが形姿は優れ、古式を継承した撞座の位置、乳の形など、時代の特徴をよく表している。

25

どうしょう

銅鐘

市 平成9年12月8日 備前市吉永町加賀美(八塔寺)

JR山陽本線吉永駅
車約30分

正保3年(1646)、岡山藩主池田光政の治国の功業を祈ってつくられたもので、八塔寺が大阪の鋳物師(いもじ)大工、仏金屋宗伝家次に铸造を依頼している。

縦帯(じゅうたい)の端が駒瓜上に及ぶのは珍しく、また撞座(つきざ)は近世的であるが、駒瓜が薄く控えめで、全体に中世梵鐘の風格があり、八塔寺の隆盛期を語っている。

71

みょうこくじわにぐち

妙圀寺鰐口

市 昭和46年10月6日 備前市浦伊部

JR赤穂線伊部駅
車約5分

鰐口とは、神社仏閣の堂前、軒下に吊り下げ、参拝のときに打ち鳴らす鍍銅の鼓。刻銘から、直径18.5cmのものは、康暦2年(1380)讃州高岡郷醫王寺に、また直径22.0cmのものは永享9年(1437)讃州香東郡大田郷松直村権現若一王子に奉納されていたことがわかる。

二つの鰐口が、妙圀寺に伝えられた経緯ははっきりしないが、室町時代海上貿易をしていたとされる来住家(檀家筆頭)との関連が考えられる。

67

びぜんやきこまいぬ

備前焼狛犬

県 昭和53年4月14日 備前市木谷(天神社)

備前陶芸美術館へ
寄託

木谷天神社へ奉納された備前焼(閑谷焼)の狛犬。像高は阿形33.7cm、吽形33.4cm。

姿は左右ほぼ同じで、たてがみの先端は盛り上がるように渦巻きになっている。胸のあたりにたくましい筋肉と、毛の櫛目に力強さがあるものの、全体的に丸味があり、温和な像である。

銘文から貞享3年(1686)に閑谷焼窯で焼かれたことがわかる。体部には「天神宮」の文字が刻まれている。

26

うさはちまんぐうびぜんやきこまいぬ

宇佐八幡宮備前焼狛犬

市 昭和46年10月6日 備前市西片上

JR赤穂線西片上駅
徒歩約5分

像高約1.4m、胴回り約2.5m。備前焼宮獅子の代表的作品であり、像高は最大級である。

阿形には「文政九丙戌年(1826)九月吉日 備前 釜元 森五兵衛尉 正統」と、吽形には「伊部細工人 服部章兵尚芳 森五兵衛 正統」と刻まれている。森五兵衛は大窯末期の細工物と茶器の名工。服部章兵は昇兵ともいい、脇細工人を努めた。

66

びぜんやきらんましし

備前焼欄間獅子

県 昭和34年3月27日 備前市伊部(長法寺)

備前陶芸美術館へ
寄託

長法寺の庫裏(くり)の欄間にはめ込むために作られた備前焼の追合獅子。厚さ2cm、縦25.4cm〜27cm、横25.2cm〜28.7cmの一对である。

江戸時代、備前焼は置物、狛犬などの細工物を制作するようになるが、欄間に備前焼が入られるのは非常に珍しい。

これと同形のものが吉備津神社(岡山市)に奉納されており、寛文12年(1672)、木村彦三郎作であることから、これも江戸時代中期の優品と推定される。

24

びぜんやきちやつぽ

備前焼茶壺

県 昭和31年9月25日 備前市浦伊部(個人)



高さ30.8cm、胴径28.2cm、口径15.1cm、底径17.1cm。

室町時代末期の作品とみられ、胴径に比べて背丈の低い茶壺である。

焼成は良好で、口部から肩にかけてごまがかかっている。

胴に「天文廿三年(1554)甲寅七月吉日 伊部木村二郎右衛門尉」の銘がある。木村姓は窯元六姓のうちの一つ。

23

ちようほうじびぜんやきかびん

長法寺備前焼花瓶

市 昭和52年8月19日 備前市伊部

備前陶芸美術館へ
寄託

明暦3年(1657)に作られた高さ52.1cm、口径29.3cm、最大胴形18.5cm、底径19.8cmの備前焼の花瓶(広口花器)。緩やかに張った胴の下部が細くなり、底が広がっている。

胴から底にかけて「奉寄進花瓶壹対 如法経堂御宝前 施主 和気郡伊部木村住人 后室妙讃 千時明暦参季 二月拾五日 敬白」という銘がある。御宝前に一對寄進とあるが、現在一つしか残っていない。

68

きんでいそうかもんつぽ

金泥草花紋壺

市 昭和57年1月21日 備前市日生町(個人)

備前市加子浦歴史
文化館へ寄託

高さ25cm、胴径21.5cm、口径13.5cm、底径13×12.5cm。

輪積み技法による室町時代初期から中期にかけての特色をもつ。

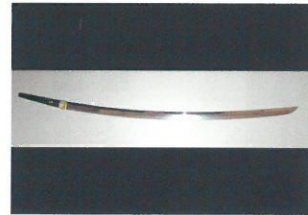
胴部に櫛目草花紋を彫り、その上から金泥で大きく草花紋様を描いている。ヘラ描き草花紋、ケサ紋は常滑、越前に多数みられるが、備前焼ではほとんどなく、また金泥草花紋壺は備前焼では唯一点である。

69

たちむめい(でんくにとし)

太刀 無銘(伝国俊)

県 昭和39年12月2日 備前市三石(個人)



刀長65.3cm(2尺1寸5分)、反り2.4cm(7分)。

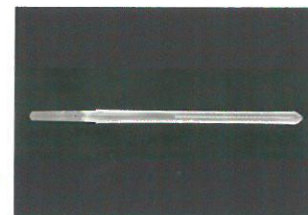
無銘ではあるが、地刃に鎌倉時代中期の山城国の刀工来派初期の特徴がみられる。来派には「二字国俊」と「来国俊」の二人の国俊がおり、親子ともいわれているが、この刀は「二字国俊」の作と推定される。もとは讃岐松平家に伝わった物だといわれている。

28

つるぎ めいすけさだ

剣 銘祐定

県 昭和55年4月8日 備前市八木山(鏡石神社)

岡山県立博物館へ
寄託

岡山藩2代藩主池田綱政が、鏡石神社(備前市八木山)に奉納したもの。寛文9年(1669)に長船の刀匠祐定がつくった両刃の直刀。

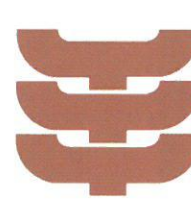
刀長91.5cm、鋒先長3.1cm、先幅5.6cm、元幅5.8cm。新刀ではあるが、身幅の広い豪壮な剣で、秀作納刀である。

27

あおえつぐよしのたち

青江次吉の太刀

市 昭和60年1月22日 備前市日生町(個人)



鎌倉時代末期の名工備中国の青江次吉が作刀したもの。

長さ62.2cm、反り1.8cm。鎬(しのぎ)造りでやや細身ながら、摺上げのあと太刀の姿を古風に残している。

太刀は逆丁子(さかちょうじ)に逆足(さかあし)入り金筋(きんすじ)を交え、径(なかご)は先を折返し、「次吉」と二字銘がある。目釘穴2個、鑢(やすり)は大筋違いになり、研は当代随一の(故)小野光敬(人間国宝)による。

70

四座講式

国 明治34年8月2日 備前市蕃山(正楽寺)



岡山県立博物館へ
寄託



講式とは平安時代末頃から行われた釈迦、菩薩などの仏教儀式の作法や順序を記したもので、明恵(みょうえ)上人(1173~1232)によって建保3年(1215)に書かれた。「涅槃(ねはん)講式」「十六羅漢講式」「如来遺跡講式」「舍利講式」の4巻を総称して四座講式という。

これは高野山月輪院の住職良弁旧蔵のもので、鎌倉時代後期の写本とみられ、流麗で書風も優れている。

9

おおたきさんふくしょうじてつげんぼんいっさいきょう

大滝山福生寺鉄眼版一切経

市 昭和57年2月19日 備前市大内



JR赤穂線香登駅
車約10分



鉄眼版一切経は大蔵経ともいわれ、宇治万福寺の隠元禅師の弟子、鉄眼禅師が寛文9年(1669)から天和元年(1681)に開版した総巻数6930巻(2094冊)が教義別に275帙(折り箱包み)に収められたもの。

福生寺には寛保3年(1743)から延享元年(1744)にかけて納巻され、翌年に八角輪蔵(輪転式経蔵)を建てこれを収めた。輪蔵を一回転させると、一切経全巻を読んだと同様に功德があるとされる。今も全冊数の約9割が保管されている。

79

ちようほうじだいはんにやきよう

長法寺大般若経

市 昭和56年7月24日 備前市伊部



JR赤穂線伊部駅
車約5分



大般若経は正式には大般若波羅密多經といい、大乘仏教の初期の經典で般若經典類を集大成したものである。

長法寺にあるのは600余巻の經典のうち240余巻である。うち一卷に応安2年(1369)4月の年記があり、紙質、墨質などから南北朝時代の写経とみられる。

上質和紙、短冊型、縦24cm、幅9cm。

残存するものは少なく、多くの人の多年にわたる写経の努力がうかがえる貴重な史料である。

78

はぎわらぎよくしたんざく

萩原玉芝短冊

市 平成11年5月27日 備前市日生町日生



備前市加子浦歴史
文化館所蔵



文政8年(1825)日生町寒河に生まれる。通称を三之助、のち慶治と改名、玉芝は号で、ほかに守静庵・余花園などがある。(1901没)

寒河村名主の職を捨て、俳諧の名家桜井梅室の門に入り、全国を行脚して俳諧の奥義を極めた。晩年は岡山で指導者として活躍し、著書に『羽州玉芝聯句集』、『玉芝句集』がある。

この短冊は縦36cm、横6cmで、「祝初老 老の名を得ても 常磐酒若みどり 玉芝」「師のもとに 春を迎え うき旅は人の ことなり今朝のはる 玉芝」と書かれてある。

80

ちようほうじこもんじょ

長法寺古文書

市 昭和53年4月21日 備前市伊部



JR赤穂線伊部駅
車約5分



長法寺に伝わる古文書のうち、重要文書である10点を選んで天和2年(1682)に一卷にまとめられたもの。

当時の下知状等は貴重であり、10点のうち、寛文2年のもの以外はすべて中世(鎌倉、南北朝、室町、安土桃山)のものである。中には浦上家の古文書もあり、地域史の解明に役立つ重要資料である。

81

しずたにちゅうがっこうかんけいれきしりょう

閑谷中学校関係歴史資料

県 平成13年3月23日 備前市閑谷



JR山陽本線吉永駅
車約5分



火除山の東側にある文庫内に収蔵されていた書籍群。閑谷学校で教科書として使用された膨大な漢籍、和書のうち、近代以降の時期に入庫されたもの。

資料が継続的にまとまって保存されることは珍しく、岡山の教育の変遷を物語る歴史資料である。

29

ぼうせいほうかくきくきようおよびくだま、まがたま

仿製方格矩鏡及び管玉、勾玉

市 昭和46年10月6日 備前市香登本



備前市歴史民俗
資料館へ寄託



国指定史跡丸山古墳石室内から発見された副葬品。

鏡は出土した30数面の仿製鏡の一つで、直径13cm。中国の方格矩鏡を模した和製青銅鏡で、鏡背には百虎の文様がある。

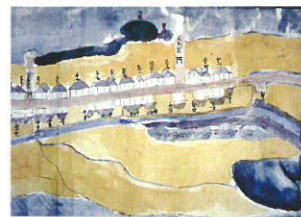
管玉3個はいずれも碧玉岩(出雲石)製。首飾りなどの装身具として使われ、大きいものは長さ5.9cm、直径1.9cm。勾玉も装身具で、長さ2cm、厚さ7mmの水晶。

72

わけぐんみつしむらおうかんすじいえなみぶんけんえず

和気郡三石村往還筋家並分見絵図

市 昭和46年10月6日 備前市三石



備前市三石出張所
所蔵



天保9年(1838)、三石村名主治右衛門が、幕府の巡察官である幕府巡見使の来藩にあたってつくった2巻の絵図巻物。長さ4m65cm、幅30cmで、12代將軍家慶の就任の年の様子を描いたもの。

「往還図」には三石村から西片上村にいたる約12kmの村名、石高、山、河、田畑、社寺などが、「家並図」には三石宿の家々が描かれている。当時の巡見の厳肅な様子、また歴史的、地理的狀況が明示されており、歴史資料として非常に貴重な文献である。

73

でんがくばん

田楽板

市 昭和52年3月31日 備前市吉永町吉永中(春日神社)

備前市吉永美術館へ
寄託

春日神社の祭礼に行われていた相撲と流鏑馬(やぶさめ)の番付を松板に彫ったもの。縦28.3cm、横47.7cm、厚2.2cmで、正和4年(1315)の銘がある。

「注進大明神九月相撲田楽事」と題されており、神社に奉納する相撲行事と流鏑馬の勤仕の順番や勤仕者の名前が丁寧に板に彫り込まれている。番付板に結果を彫り込んで神社へ納めることにより、神に注進し、番付の厳守を誓ったものである。

74

はつとうじせいさつ

八塔寺制札

市 昭和52年3月31日 備前市吉永町加賀美

備前市吉永美術館
所蔵

永正18年(1521)掃部助(三石城主浦上村宗)、天正7年(1579)与七郎(未詳)、天正10年(1582)八郎(宇喜田秀家の幼名)がそれぞれ八塔寺に与えた制札。内容はすべて同じで、本堂を再興し、仏像の造立せらるべきことなど5ヶ条からなる。縦30~36cm、横25~31cmの松、桧板を槍鉋削りで仕上げている。八塔寺は、八塔寺村(現吉永町加賀美)にある天台宗の寺院で、奈良時代の建立と伝えられる。

76

かんもんくだしぶみはんぎ

寛文下文版木

市 昭和52年3月31日 備前市吉永町神根本(神根神社)

JR山陽本線吉永駅
車約15分

池田光政からいただいた神田が、洪水に流されて荒地となっていたため、文久元年(1861)神根神社祠官北川宗国が藩に再興を願ひ出た。

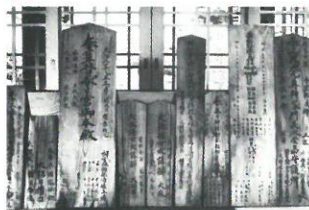
その勧進が許可された時、光政の神儒の正しきを教導するよう命じた下文「芳烈公御教訓の御下文」を版木におこしたの。縦28.5cm、横18.0cm。

75

かすがじんじゃむなふだ

春日神社棟札

市 昭和57年1月21日 備前市日生町日生

JR赤穂線日生駅
車約5分

日生地域にある高良八幡宮、恵美須宮、荒神社、春日神社などの神社の棟札が集められ、春日神社に保存されている。

最古のものは、高良八幡宮の延宝2年(1674)8月のもので、各神社の創建や変遷がわかるとともに、日生地域の庄屋、大工、左官などの名前もあり貴重な史料である。

77

きゅうしずたにがつこうつけたりつばきやま・せきもん・つだながたたくあとおまびこうようてい

旧閑谷学校 附 椿山・石門・津田永忠宅跡及び黄葉亭

国 昭和29年3月20日 備前市閑谷

JR山陽本線吉永駅
車約5分

閑谷学校は寛文10年(1670)岡山藩主池田光政によって設立された。聖廟、講堂、小斎、習芸斎、文庫、門、石扉、石橋、石門等が現在目にする形で完成したのは元禄14年(1701)である。

学校には農民や医者、武士などいろいろな身分の人たちが学びに来ており、階級意識の強い封建時代に、藩主が率先して庶民に学習の門戸を開いた点で、日本教育史の上で特筆されるべきものである。また現存する江戸時代の学校施設の建造物としての価値も極めて高い。

10

まるやまこふん

丸山古墳

国 昭和32年10月11日 備前市畠田・福田・香登本

JR赤穂線香登駅
南東へ約500m

吉井川東岸の丘陵上に立地する造り出し付き円墳。規模は南北68m、東西55m、高さ9mで、二段築成の墳丘をなす。埴輪、葺石がある。墳頂部の竪穴式石室に讃岐東部の白色火山石製で装飾文を刻んだ石棺が安置されている。竪穴式石室から出土したとされる遺物は舶載三角縁神獣鏡や仿製鏡30数面のほか石製四脚盤、車輪石、大型管玉、勾玉など多種の遺物の出土が知られている。古墳の築造時期は4世紀後半頃とされ、前方後円墳を頂点とする古墳時代前期にあつて、大形円墳の形態を採る首長墓として注目される。

11

おかやまはんしゅいけだけぼしよつけたりつだながただはか

岡山藩主池田家墓所 附 津田永忠墓

国 平成10年4月8日 備前市吉永町和意谷

JR山陽本線吉永駅
車約20分

池田家墓所は、初代岡山藩主池田光政が造営した和意谷墓所(備前市)と、2代綱政が造営した正覚谷墓所(岡山市曹源寺)の2ヶ所にある。和意谷墓所は寛文7年(1667)に造営された。和意谷墓所には一から七のお山があり、「一のお山」に祖父輝政、「二のお山」に父利隆、「三のお山」に光政が葬られるなど、一族の15の墓がある。気質を異にする2人の藩主光政と綱政によってつくられた墓所は、それぞれに儒教、仏教の影響を受け、その特色と個性をよく表している。

13

いけなだこふん

池灘古墳

市 昭和46年10月6日 備前市大内(個人)

JR赤穂線伊部駅
車約10分

大ヶ池西北に立地する径20m、高さ約4.3mの円墳。墳丘は少し削平が見られるが、斜面上部を切断して造営した周溝はよく遺存している。埋葬施設は両袖式横穴式石室で石室全長10.05mである。玄室は長さ5.9m、奥壁幅1.9m、高さ2.75m。玄室側壁はやや大きめの石を中心に4・5段を持ち送り積みとしている。玄室天井石は巨岩平石3と同長石1を架け平天井とし、羨道天井石下端との段差1mをなす特徴的な石室構築である。墳丘や石室の保存状態は大変良い。吉井川以東では現存する代表的な大型横穴式石室の1つと考えられる。古墳時代後期の6世紀後半に築造され7世紀にかけての追葬が推定される。のちの香登廃寺など建立に係る新興の有力な家父長層の造営による古墳と推察される。

91

てんじんやまこふん

天神山古墳

市 昭和51年3月21日 備前市新庄

JR赤穂線香登駅
車約15分

新庄天神山古墳と通称されている本墳は、行政区画では瀬戸内市長船町にある花光寺山古墳(前方後円墳)の北に接する位置に所在する。かつては前方後円墳とみなされた時もあったが、測量調査により径41.5mの円墳であることが判明した。埴輪・葺石は不明。堅穴式石室内に無蓋の刳り抜き式の石棺が安置され、水銀朱に染まった砂質凝灰岩製石枕は岡山県立博物館に保管されている。石室内からは石剣、貝釧、玉類、剣などが出土している。本墳は先の花光寺山古墳に続く4世紀中頃の築造と推測されている。

94

びぜんとうきかまあと

備前陶器窯跡(伊部南大窯跡・伊部西大窯跡・伊部北大窯跡)

国 平成21年2月12日 備前市伊部

JR赤穂線伊部駅
徒歩約5分ほか

室町時代末期に築かれたといわれる備前焼の大窯は、梶原(かやはら)山麓に南大窯跡、医王(いおう)山麓に西大窯跡、不老(ふろう)山麓に北大窯跡があり、いずれの窯でも長大な規模をもつ複数の窯跡が見つかった。3ヶ所の大窯は、岡山藩の保護と統制を受けながら、窯元六姓の制度の中で幕末まで操業された。

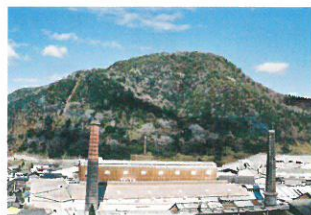
中世末から近世にかけて成立した伊部南大窯跡のほかに、同時に成立して中心的な窯場となる西大窯、北大窯を追加して一体的に保護を図る目的で、平成21年度追加指定および名称変更を受けた。

12

みつしじょうせき

三石城跡

県 昭和54年3月27日 備前市三石

JR山陽本線三石駅
徒歩約50分

三石城は標高291mの天王山山頂に構築されていた中世の山城である。元弘3年(1333)、三石の地頭伊東大和二郎が南朝方の拳兵に呼応し、山陽道を塞ぐ目的で城郭を構えたのがはじまりとされ、室町時代には備前守護代の浦上氏が居城とした。戦国時代の終わり頃、享禄4年(1531)、浦上村宗の子宗景が天神山城へ移り廃城となった。

城跡に上部構築物は残っていないが、大手櫓跡の石垣や、中世山城の特徴を表す堀切、井戸等の遺構が残っている。

31

しずたにやきかまあと

閑谷焼窯跡

県 昭和34年3月27日 備前市閑谷(個人)

閑谷学校より
南東へ約4km

閑谷学校の屋根に備前焼瓦がはじめて使われたのは貞享元年(1684)の聖廟完成の時であった。この建物の瓦を焼くためにつくられた窯で、後に聖廟で用いる祭器や藩主が使用する茶器、細工物などを焼成した。

聖廟、芳烈祠、講堂に要した備前焼の瓦は約5万枚で、伊部で焼いて運ぶことが困難だったため、学校近くに山の傾斜を利用した連房式の窯を築き生産された。全長約9mの小窯2基があり、貞享年間(1684~88)から宝永年間(1704~11)まで操業していたとみられる。

30

びぜんやきくまやまこようせき

備前焼熊山古窯跡

市 昭和46年10月6日 備前市伊部・香登

JR赤穂線香登駅
車約15分

熊山山麓一帯には、平安終わり頃から室町後半にかけての窯跡が多く分布している。そのうち熊山古窯跡は、医王山と不老山の間を流れる不老川に沿って点在している。

窯跡群数は30基をこえ、そのうちの17基が史跡に指定されている。鎌倉時代のものは中腹に、室町時代前半のものは山頂近くに立地する傾向がある。

90

しもやまりゆうおうざんなんとうろくこようせき

下山龍王山南東麓古窯跡

市 昭和62年11月26日 備前市伊部

JR赤穂線伊部駅
車約10分

下山龍王山南東麓の標高約80mの山中、斜面の傾斜に沿って築かれた備前焼の窯跡。

窯体は全長約6m(推定)、最大幅約1.5m。半地下式の窯。

出土品に掘目の施された掘鉢があること、還元炎焼成であることから、鎌倉時代の窯と考えられる。

100

びぜんにしおおがまあと

備前西大窯跡

市 昭和51年3月21日 備前市伊部

JR赤穂線伊部駅
車約10分

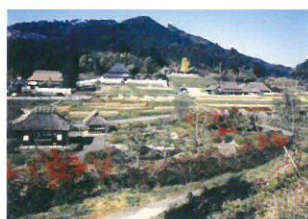
備前西大窯跡は、医王山東側山麓の緩斜面に位置する近世の共同窯で、全長40m弱、幅4.5~5m、勾配約16度の窯跡が確認できる。平成21、22年度には史跡地の北側で、平安の終わり頃から南北朝期の窯跡の発掘調査が行われ、窯跡群としての性格が明らかになりつつある。史跡地のほとんどが平成21年度国指定史跡備前陶器窯跡の追加指定を受け、一部が市指定地となっている。

95

さんじょうがらんはつとうじのきゆうせき

山上伽藍八塔寺の旧跡

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町加賀美

JR山陽本線吉永駅
車約30分

八塔寺の全盛時代には、72の僧坊や十三重塔のある堂伽藍が展開したが、国境のため、南北朝以来たびたび兵火に焼かれて次第に衰退。

永正14年(1517)、三石城主浦上村宗と置塩赤松義村による「八塔寺合戦」で高頭寺の山門以外の建物は全て焼失した。天正年間(1573~1592)、秀吉の庇護を受け、宇喜多家からも寺領の寄進があった。その後池田綱政が八塔寺本堂と三重塔を再建したが、寛政2年(1790)不慮の火災でまたも焼失した。

82

さんじょうがらんはつとうじのさんじゅうのとうあと

山上伽藍八塔寺の三重塔跡

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町加賀美



JR山陽本線吉永駅
車約30分



江戸時代後期の塔で、寛政2年(1790)の火災で本堂とともに焼失し、四天王の礎石4個が残る。

礎石は花崗岩で、表面中央に、方三寸深さ一寸五分のホソ穴がある。この外側に側柱礎が12個据えられていたとみられるが、現在は無い。礎石は小さく、間隔は約1.6m。四天王柱礎を基準に復元して計算すると、初層が十三尺二寸四方(1辺約4m)の平面をもつ三重塔だったと考えられる。

83

のがみごずんのうぐうたくらうしがみしや

野上牛頭天王宮倉牛神社

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町福満



JR山陽本線吉永駅
車約10分



「牛神(うしがみ)さま」の愛称で呼ばれる。

かつては牛馬、農耕の神様で、この山の笹を病牛に食べさせるとたちまち全快すると信じられていた。

古来から社殿を造らず、備前焼の牛が積まれた山腹が神殿で、正面の大牛(石を彫刻した牛)が祭神という珍しい民俗信仰である。

神霊前に高く積まれた備前焼の牛を一頭借りて帰り、成就後もう一頭を添えて倍にしてお礼参りするのが習わしとなっている。

84

まんがんじのきゆうせき

満願寺の旧跡

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町福満



JR山陽本線吉永駅
車約5分



孝謙天皇(奈良時代)の勅願により報恩大使が開基したと伝えられる。備前四十八カ寺の一つで、7堂13坊があったが、寛文6年(1666)に岡山藩主池田光政による寺院淘汰で廃寺となった。

残存していた本堂も貞享4年(1687)に取り壊され、地藏菩薩と四天王は松本寺へ移された。現在は鎮守堂だけが残し、あとは全て田畑や民家の屋敷地となっている。地形から約一町(約109m)四方の寺域をもつ寺院が南面して建てられていたと推定される。

85

かがといちりづか

香登一里塚

市 昭和46年10月6日 備前市香登本



JR赤穂線香登駅
車約5分



一里塚は、江戸時代に大名の参勤交代や旅人の往来の指標とするため、街道の一里(約4km)ごとに設けられた。

香登一里塚は、旧山陽道沿いの南北2カ所にあり、北塚のみ大内神社境内に残っている。

北塚は、南北長7m、東西幅5m、南端の高さ1.8mの円形で、周囲が石積みとなっている。かつては榎の太木があったが、今は「史跡一里塚」の碑と春日灯籠が建っている。

86

さかたかいづか

坂田貝塚

市 昭和46年10月6日 備前市鶴海



JR赤穂線伊部駅
車約15分



鶴海坂田にある貝塚で、坂田集落内(1号)、中西の山中(2号)、布浜越え内山(3号)の3カ所が確認されている。

約1万年前のサヌカイトの打製石槍、須恵器、弥生土器のほか、弥生時代以降の貝塚が散在している。また中世の住居跡とみられる石組遺構などが検出され、その周辺から初期備前焼、土鍋、土製のカマドが出土している。

87

くまざわばんざんたくあと

熊沢蕃山宅跡

市 昭和46年10月6日 備前市蕃山



JR赤穂線伊里駅
車約5分



熊沢蕃山は江戸時代の儒学者で、岡山藩の儒官。元和5年(1619)～元禄4年(1691)。名は伯継、字は了介。通称次郎八。蕃山、息遊軒と号した。

23歳で中江藤樹に入門し、陽明学を学ぶ。慶安3年(1650)32歳のとき、岡山藩主池田光政の信任を得て番頭として国事に参加した。

明暦3年(1657)から寛文元年(1661)まで、知行地の和気郡寺口村(備前市蕃山)に隠棲した。

88

うらかみむらむねのつか

浦上村宗の塚

市 昭和46年10月6日 備前市木谷



JR赤穂線備前片上駅
車約5分



三石城主浦上村宗の供養塔で、室町時代の様式をもつ五輪の宝篋印塔。

享禄4年(1531)大阪天王寺で戦死した村宗の遺体を、嫡子政宗、次子宗景の兄弟が収めて帰国し、和気郡木谷村(備前市木谷)に葬ったと伝えられる。浦上氏による三石城体制は村宗の死をもって終わった。

村宗の墓(向かって右)は高さ203cmで、四面に梵字が刻まれている。妻の墓(向かって左)は高さ169cm。いずれも花崗岩製。

89

やまだほうこくたくあと

山田方谷宅跡

市 昭和46年10月6日 備前市蕃山



JR赤穂線伊里駅
車約5分



備前松山藩の漢学者、賢臣。文化2年(1805)～明治10年(1877)。

明治6年(1873)2月、閑谷学校再興のため請われて来校し、閑谷精舎として再開した。

門徒たちが彼のために明治7年(1874)、熊沢蕃山宅の近くに草庵を築き遊息の場とし、方谷はたびたびここを訪れ、同志たちと清談し、詩を詠んだ。

90

甚九郎顕彰碑

市 昭和58年2月4日 備前市日生町日生(西念寺)

JR赤穂駅日生駅
車約5分

江戸時代中期に活躍し、西念寺建立に尽力した日生の廻船業者田淵屋末友甚九郎の事跡を記した顕彰碑。高さ1.01m、幅0.40m、厚さ0.22m。

碑文は甚九郎が亡くなった直後の享保19年(1734)に記されており、伝説の人物甚九郎の存在を証する重要な資料である。

碑は近くの山中の竹やぶに埋まっていたのが見つかり、昭和58年(1983)、ゆかりの西念寺に移築された。

99

大井戸

市 昭和55年8月12日 備前市日生町大多府



日生港から定期船



「六角大井戸」と呼ばれ、六角形の石枠からなる掘抜き六角井戸。直径2m、深さ6m。

元禄11年(1698)、大多府港開港時に、諸国の廻船、御用船に飲料水を供給するため、岡山藩郡代津田永忠が近隣の名主を動員して構築した。

井戸は島の中央にあり、この島唯一の水源地だったため、島民の飲料水としても利用された。

96

播備国境の標石

市 昭和46年10月6日 備前市三石

JR山陽本線三石駅
車約10分 徒歩約10分

元禄16年(1703)、近世山陽道にたてられた備前と播磨の国境標石。高さ1.8m、一辺30cmの角柱で、花崗岩に「従是西備前国」と刻まれている。

＜船坂山周辺の変遷＞

古代：山陽道(古代山陽官道、大路)、尾根・谷

中世：重源が古代山陽道を開削整備(路線替)

近世：山陽街道(2級街道)、船坂中腹開削

近代：国道山陽道(1級)、山陽街道より15m下

現代：国道2号(1級)、国道山陽道より約20m下

93

燈籠堂石塁

市 昭和55年8月12日 備前市日生町大多府



日生港から定期船



元禄11年(1698)、津田永忠の指揮により大多府島に港が開かれた。燈籠堂は正徳4年(1714)には障子の張替えをした記録が残るが、いつできたかは不明である。下部約5.3m、上部約4.7mの正方形、高さ約10mの建造物に、土台は台形石積で6段の石段をもつ。

堂は島東方の丘の上にあり、航路の安全と港への道しるべとして、明治初年まで燈をともしつづけた。現在では石塁だけが残り、燈籠堂は昭和61年(1986)に復元され、池田隆政氏により照冥台と命名された。

97

キリシタン遺跡

市 昭和57年1月21日 備前市日生町日生(鶴島)



海上タクシー利用



島に建立された碑文によると、明治政府のキリシタン禁令により、長崎県浦上のキリシタン117名が、明治3年(1870)に鶴島に流罪され、同6年4月までの約2年間ここで生活した。

住居跡、井戸、改宗のため礼拝させた小祠、島の生活の中で死亡したキリシタンを葬る墓地などがある。

98

井田跡

市 平成元年11月25日 備前市徳浪

JR赤穂駅伊里駅
車約5分

井田とは、岡山藩主池田光政が中国周代の土地制度とされる田制(井田法)を再現したものの。津田永忠に命じ、寛文11年(1671)に上井田が完成した。貞享元年(1684)から元禄元年(1688)にかけて、その南に下井田が造成された。現在も整然とした区画が残り、上井田の一角に高さ3.3m、幅1.2mの花崗岩製の碑が建てられている。

(西穀一篆額、山田方谷撰文、鎌田玄溪書)

102

首塚

市 平成元年9月19日 備前市吉永町金谷

JR山陽本線吉永駅
車約10分

延元元年(1336)、新田義貞の弟脇屋義助の兵が、三石の城兵を三石城の麓で破り、討ち取った敵の首が、付近の山麓に散乱したり河川に流れたため、後に手厚く葬り碑を建てたといわれている。

高さ1.8mの石碑で、「南無阿弥陀仏」と刻まれている。碑の前に小さな五輪塔がある。

現在は「首塚さま」と呼ばれ、頸部から上の病気におかげがあるといわれている。

101

伝太閤門跡

市 平成6年4月1日 備前市浦伊部

JR赤穂駅伊部駅
車約5分

戦国時代末期から江戸時代にかけて活躍した豪商来住家にある門。

室町時代の築造とみられる高さ約2mの長い石垣の切れ目にある門で、造られた当時の瓦が現存している。平成6年(1994)に改修。

備中高松攻めのため西下した羽柴秀吉が天正10年(1582)伊部で地元年寄に制札を与えたといわれ、帰途の秀吉を迎えるため、御殿と門を新築したが、本能寺の変で急ぎ引き返したため立ち寄らなかったと伝えられる。

103

おおたきさん・くまやま ふくむたきにわ、くまやまこようせき

大滝山・熊山 含滝庭、熊山古窯跡

市 昭和46年10月6日 備前市伊部・大内・香登本



JR赤穂線伊部駅
車約15分



熊山から大滝山にかけて広がる名勝地。標高508mの熊山山頂には、帝釈山霊山寺という山上伽藍の跡がある。熊山の南側にある香登、伊部境界の自然の中に、古利大滝山福生寺があり、屏風岩の下には滝庭がある。

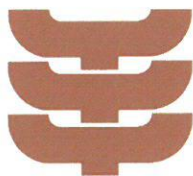
備前焼発祥の熊山古窯跡数十カ所も含んでいる。この付近一帯は、このような歴史とともに自然も残されており、「大滝山郷土自然保護地域」になっている。

105

たかとりけのていえん

高取家の庭園

市 昭和36年2月10日 備前市吉永町神根本(個人)



JR山陽本線吉永駅
車約10分



江戸時代中期の遠州流回遊式庭園と伝わる。

鬼瓦に「文化十三年(1816)赤穂砂子村大崎中蔵作」の銘がある。

<遠州流>小堀遠州(こぼりえんしゅう): 天正7年(1579)滋賀県生まれ。備前松山藩2代藩主。茶人、建築家、作庭家。駿府城、二条城など数々の普請奉行を歴任。県内では頼久寺庭園や東湖園などを手がけるなど、建築、造園に優れた手腕を発揮した。

102

みたにのたき

深谷の滝

市 昭和46年10月6日 備前市三石



JR山陽本線三石駅
車約10分



備前と播磨の国境にある石塔山(422m)を源とする。滝は雌雄の2段になっており、上が雄滝で幅約2mで13m落下し、径4m、深さ5mの滝壺に落ちる。その滝壺からあふれ落ちる小さな滝を雌滝という。

雄滝の左側にある小さな祠は龍(おかみ)神社といい、龍神(雨の神)が祀られている。

106

すみよしじまのじゅりん

住吉島の樹林

県 昭和39年5月6日 備前市鶴海



住吉島は瀬戸内海国立公園の区域内、鶴海港沖にある周囲約400mの無人島。中央に住吉神社社殿があり、そこから南に参道があり、海岸近くに鳥居が立てられている。島全体にウバメガシが群生し、その数は200本を超え、最大のものは目通周囲2.1m、根元周囲2.5m、樹高15mである。植生はウバメガシトベラ群集とみられ、地表にはヒトツバが全島にわたって叢生している。尊厳な神域とされていたため、ほとんど人の手をつけられることなく現在にいたっており、貴重な原生林である。

32

かなひこじんじゃしやそう

金彦神社社叢

市 昭和52年3月31日 備前市吉永町金谷



JR山陽本線吉永駅
車約10分



鳥居をくぐると、右(東)にモミジ、カヤ、ケヤキ、左(西)に杉の巨木が並ぶ。

本殿の左にはモッコク、サルスベリの植樹が残っている。本殿の外圍にはカヤの巨幹を中心に、カシ、スギ、モミ、ムクノキなどの巨木が散在している。

金彦神社は鉾山の守護神、金山彦命を主神とし、ほかに4神を祀っている。

108

こうらはちまんのしやそう

高良八幡の社叢

市 昭和55年8月12日 備前市日生町日生



JR赤穂線日生駅
車約5分



高良八幡宮の創建年代は不明だが、延宝2年(1674)社殿を再建している。日生港を守る八幡宮、金刀比羅宮を祭る神域としてあがめられ、また社叢は古くから神社の森として憩いの場所となっている。

社叢はウバメガシが大半を占め、地表にはヒトツバが密生している。ウバメガシの最大のものは、目通り1.7m、根元周囲2m、根張り12×10m。

111

しいのじゅりん

椎の樹林

市 昭和53年4月21日 備前市久々井



JR赤穂線伊部駅
車約15分



久々井八幡宮社叢内に約150本の椎があり、最大のものは目通り1.5mである。

ほかにツバキ、ヒサカキ、アラカシ、ヤブニッケイ、ナツハゼ、イヌビワ、コバノミソツツジ、ナワシログミなどが群生し、下草はウラジロ、ヤブコウジ、ネザサが生えている。スダジイ-ヤブコウジ群集の自然林である。

109

こうやみずきせいち

コウヤミズキ自生地

市 昭和53年12月9日 備前市吉永町高田



昭和52年(1977)、吉永町高田の八塔寺川兩岸にコウヤミズキの群生が見つかった。

近畿、中国、四国、九州などに分布する。岡山県では珍しく、岡山県の絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。

コウヤミズキはマンサク科の落葉低木で、高さ3~5m。葉は互生し広卵状心形で、縁がのこぎりの刃のようになっている。春に黄色の花を咲かせる。

110

さいかんじのいちよう

西願寺のイチョウ

市 昭和57年1月21日 備前市日生町寒河

JR赤穂線寒河駅
車約5分

西願寺は享保4年(1719)に現在の場所に建立されており、このイチョウはボダイジュとともにその頃建立記念に植樹したものとみられる。

樹高14m、根元周囲3.4m、根張り8×8m。樹齢は約300年に近いと推定される。

112

おがたまのき

おがたまの木

市 平成元年9月19日 備前市吉永町吉永中

JR山陽本線吉永駅
車約5分

樹高約10m、目通り1.7m。樹齢約200年と推定される。

神社によく植えられ、日本名の招霊(おきたま)がなまってこの名になったという。

おがたまの木はモクレン科の常緑高木で、3～4月にかけて芳香のある白い花を咲かせる。

この木は吉永小学校運動場の南端にある。

114

ひめぼたる

ヒメボタル

市 昭和52年3月31日 備前市吉永町多麻



吉永町ではヒメボタルの発生は昭和50年に確認されている。

ヒメボタルは陸生のホタルで、ゲンジボタルやヘイケボタルに比べて小さく、体長約6～9mm。雄雌の形が著しく違い、雄の方が大きい。雌は体が扁平で後羽は退化しているため飛ぶことができない。黄金色の歯切れ良い点滅が特徴である。

107

もりあおがえる

モリアオガエル

市 平成14年2月8日 備前市吉永町加賀美地内・多麻地内



モリアオガエルはやや大型の樹上性のカエルで、日本の固有種である。体長5～9cmで雌は雄より大きい。本州、四国、九州に分布する。岡山県では北部の山林に生息しているが、南部では珍しく、岡山県の絶滅危惧Ⅱ類に選定されている。岸辺の水面の垂れ下がった木の枝などに泡状の卵のうを作り卵を産む。

115

かくみ じゅほう

備前焼の製作技術 各見 壽峯

県 昭和55年4月8日 備前市伊部



備前焼製作技術保持者。大正10年(1921)生まれ。

蒔絵の技法を生かし、絵備前に取り組んだり、築窯を工夫し、コゲ、灰かぶりののはげしい鬼備前の焼成や、土味を生かし縄文土器を模した備前焼の完成など、独特の造形工夫をし、新旧取り混ぜた意欲的な造作活動を行っている。

茶器、花器などが得意で、古備前の味を生かした作品が多い。

33

いせざき じゅん

備前焼の製作技術 伊勢崎 淳

国 平成16年9月2日 備前市伊部



備前焼製作技術保持者。昭和11年(1936)生まれ。(故)伊勢崎陽山の次男。

緋襷(ひだすき)を得意とし、ロクロもの、叩き皿など巧みな造形と明るい焼けが特徴。伝統的な作風の追求と造形の可能性に意欲的に取り組むとともに、美的感覚と彫刻の手法を取り入れたオブジェや陶壁を数多く生み出している。

16

まつい ともゆき

備前焼の製作技術 松井 與之

県 平成8年7月30日 備前市西片上



備前焼製作技術保持者。昭和6年(1931)生まれ。

ろくろや手びねりで、主に茶陶や花器や酒器を製作する。

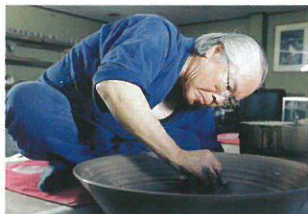
2種類の土を練り合わせて焼き上げる練り込みや、京焼の新鮮味を備前焼に取り入れ、銀彩、藍彩の焼成の研究にも熱心である。

新しい作品の創造に取り組む一方、伝統をふまえての備前焼にも力を入れる。

34

備前焼の製作技術 山本 雄一

県 平成8年7月30日 備前市伊部



備前焼製作技術保持者。昭和10年(1935)生まれ。人間国宝(故)山本陶秀の長男。

父の技法を継承する一方、備前焼の科学的焼成を研究し、昭和43年(1968)、備前焼で初めてガスを導入し、全自動のガス炉を完成させた。また裃襷(ひだすぎ)を人工的に再現するなど化学的研究にも力を注いでいる。

古備前の味を出しながら胡麻(ごま)の光沢を和らげたみごとな作品を生み出すなど、創作活動にも意欲的に取り組んでいる。

35

備前焼の製作技術 金重 晃介

県 平成24年3月9日 備前市香登本



備前焼製作技術保持者。昭和18年(1943)生まれ。人間国宝(故)金重陶陽の三男。

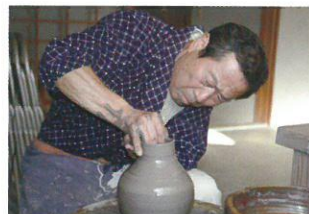
父の手法を受け継ぎ、土づくりや伝統的な登窯での焼成にこだわり、表情豊かな作品を生み出している。

茶陶や花器などの伝統的な作品群のほか、未知の可能性を引き出した造形を追求し、独創的な造形表現による作品も手がける。

37

備前焼の製作技術 吉本 正

県 平成19年3月16日 備前市閑谷



備前焼製作技術保持者。昭和18年(1943)生まれ。

人間国宝(故)藤原啓の内弟子となり、技術を磨いた。

作風は単純明快を追求し、自由におおらかに作り出される大物の壺や花入れなど、師匠譲りの風趣がみごとに活かされている。

独自に取り組んだ「たたら造り」の作品には、土味の豊かさが醸し出され、作者の工夫と技の錬磨が感じられる。

36

備前焼の製作技術 山本 出

県 平成24年3月9日 備前市伊部



備前焼製作技術保持者。昭和19年(1944)生まれ。人間国宝(故)山本陶秀の四男。

父に師事し、ロクロ技術などを学ぶ。

茶陶や花器などの伝統的な作品群のほか、土を叩き込む叩込技法、土に顔料を混ぜ込む出彩技法など、さまざまな表現に挑戦している。また、土を板状に重ね上げる積上技法による彫刻的表現の作品も手がける。

38

福石荒神社神楽獅子舞

県 昭和61年4月4日 備前市三石

JR山陽本線三石駅
車約10分

素戔鳴尊(スサノオ)を祭神とする福石荒神社の秋祭りに福石神楽団によって奉納される獅子舞。宵宮にまず当屋(現在は公民館)の門前で「出立ちの舞」を舞い、ついで行列を整え囃子に合わせて伊勢音頭を歌いながら神社に練り込む。本殿のまわりを回ったあと、神前で「神おろし」の御神楽を舞い、境内の広場で16種の曲目を舞い、唐子、猿お多福などが獅子をあしらう。翌日には早朝から各戸を回る「村まわし」が行われる。播州有年から伝わったとされ、古式をよく伝えている獅子舞である。

39

春日神社の獅子舞

市 昭和60年1月22日 備前市日生町日生

JR赤穂線日生駅
車約5分

春日神社は代々の領主赤松・宇喜多・池田氏らの尊崇が厚く、九州五島の平戸から伝わったといわれる獅子舞は、別名「山下し」と呼ばれる豪壮優美な舞である。山中から獅子を追い出して手なずけるまでの所作を表現し、天狗に扮した2人の男の子が獅子の眠りをさまし、荒れ狂う獅子はついに天狗の前に屈服する。

毎年10月の日生春日神社大祭に行われている伝統的な舞である。

118

神根神社獅子舞

市 昭和50年11月20日 備前市吉永町神根本

JR山陽本線吉永駅
車約15分

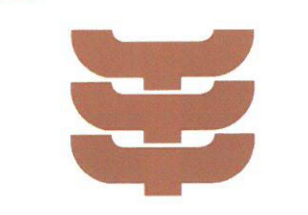
江戸時代中期に悪疫が流行した時、播州金内(兵庫県上郡町)から獅子舞を取り入れて、門出八幡宮に奉納したのが始まりと伝えられている。

別名「12神楽」と呼ばれ、12通りの舞がある。豪壮優美な舞いで、獅子が笛、太鼓の音に合わせて勇壮な闘争を繰り広げ、激しい動きをする。

116

寒河踊り

市 昭和60年1月22日 備前市日生町寒河



古代から農民の間に自然に振り付けされた寒河特有の踊りで、源平屋島の合戦に散った人々の霊を祭るため、盆踊りとして始まったと伝えられている。

三ツ星(三ツ拍子)と呼ばれ、農家の庭先で高張り提灯を高くかかげ、即興の音頭により酒樽をたたき調子に合わせて踊る。

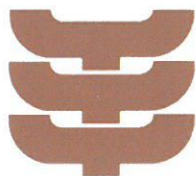
享保年間の西願寺建立の際に振付が改良され、俗に「ヤットコセー踊り」、四ツ星(四ツ拍子)と呼ばれ、口説きの調子にあわせて踊る。

119

なげぶし、くるまうた

投げ節、車唄

市 昭和55年8月12日 備前市日生町



投げ節(土手節)は日生の民謡で、節は九州の五島へ出漁、寄港したときに覚えて帰ったといわれる。歌詞は日生の海の中から自然に生まれた。

海に生きる漁師の若衆が、休みのときに娘宿へ遊びに行くときには必ずうたった。

車唄(糸つむぎ唄)は、娘宿で娘が漁網の糸をつむぐため、糸車をあやつりながら車の音にあわせてうたった。

うたは各100節ほどあり、かつての日生の生活の様子がうかがえる。

117

おおたぶぎょうこうげんろくぼうはてい

大多府漁港元禄防波堤

国 平成10年1月16日 備前市日生町大多府



日生港から定期船



元禄11年(1698)、岡山藩主池田光政が津田永忠に命じて大多府港開港のために築造した。石を2段に積む曲面形状の直立式石積防波堤で、延長129.7m、幅6.0m、高さ5.0m。後世の補修は見られるが、現存する数少ない江戸期の港湾施設で、現在も港湾施設として機能している。

大多府島は日生諸島の中で最も沖合にある周囲約5kmの島。江戸時代には岡山池田藩の番所が置かれ、西国大名などが、参勤交代の時に給水や風待ちの港として利用した。

15

しずたにがっこうしりょうかん

閑谷学校資料館

国 平成13年8月28日 備前市閑谷

JR山陽本線吉永駅
車約5分

明治38年(1905)に私立中学閑谷黌(しずたにこう)の本館として建設された。設計は岡山県が工師として福島県から招聘した江川三郎八である。石堀内火除山の西側にあり、寄棟造、棧瓦葺の木造2階建の擬洋風建築の校舎で、建築面積は762㎡。両翼を南前方に張り出したコの字型平面につくり、北側に廊下、その両端に階段を配する。外観は木骨を表に現したスティックスタイルである。昭和39年(1964)まで県立和気高等学校閑谷校舎本館として使用され、青少年教育センター時代を経て、平成7年(1995)資料館として新発足した。

14

びぜんやきのせいさくぎじゅつ

備前焼の製作技術

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市



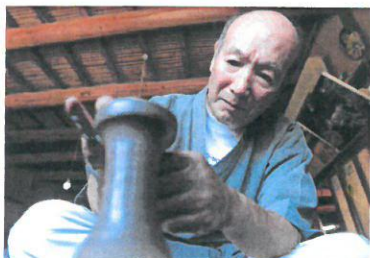
「備前焼の製作技術」保持者の認定要件

- イ、備前市内に在住し、備前焼の作陶を行っており、顕著な評価を得ていること。
- ロ、備前焼作家として 20 年以上の陶歴があること、あるいは窯元などの陶工として、30 年以上の職歴があること。
- ハ、伝統を踏まえた作陶活動を行い、新たな表現に取り組んでいること。
- ニ 後継者育成など、備前焼業界全体の発展に寄与していること。

さかきばら きよと

備前焼の製作技術 榊原 清人

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



昭和 15 年 (1940) 生まれ。榊原勤の二男。

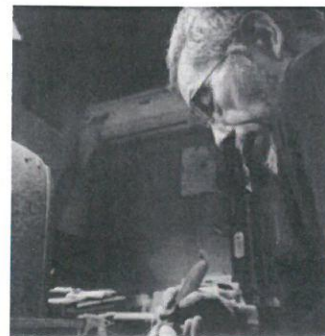
昭和 36 年 (1961) から陶芸の道へ入り、古備前を師として独学で作陶を研鑽。

伝統に根ざした茶陶・花器・酒器・食器など、バランスのとれた作陶を心掛け、特に胡麻と牡丹餅の組合せには非凡なものがある。

しまむら ひかる

備前焼の製作技術 島村 光

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市久々井



昭和 17 年 (1942) 生まれ。

猫・雀・鶏・鼠・登り窯・煙一穴・煙・松割木など、身の回りに存在する動物や情景を中心に、手びねりと型づくりによって、独創性あふれるユーモアたっぷりの置物や香炉を手掛ける。

分野 細工物 (現代)

すずき こういち

備前焼の製作技術 鈴木 黄弐

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



昭和 17 年 (1942) 生まれ。細工物を得意とした鈴木黄哉の長男。

ロクロ・手びねり・板作りなどの技法により、壺・花入・茶器・酒器・食器などのほかに干支の置物・香炉などを手掛ける。

近年は強い還元焼成による青備前の花器・大皿を追求している。

さとう いすけ たいすけ

備前焼の製作技術 佐藤 伊助 (雅号: 苔助)

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



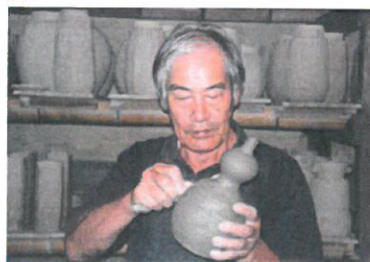
昭和 16 年 (1941) 生まれ。古陶磁収集家の父の影響で、短大卒業頃から焼き物を研究。

ロクロ物の茶陶・酒器・食器のほか細工物も手掛ける。温もりのある作品を心掛け、新しい造形にも意欲を見せる。

しばおか こういち

備前焼の製作技術 柴岡 紘一

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



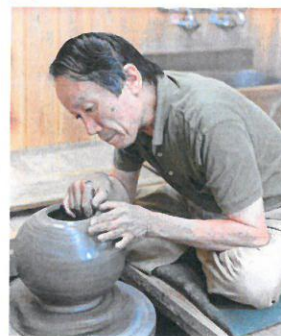
昭和 16 年 (1941) 生まれ。備前陶芸センター第 1 期生となり陶芸の道へ。

大振りの皿など食器を中心に、生活に身近な備前焼を多く手掛ける。独特の温もりのある土味・焼き味を大切に、穴窯で焼成した明るい作風が特長。

もり やすし

備前焼の製作技術 森 泰司

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



昭和 22 年 (1947) 生まれ。森宝山の長男。

ロクロによる成形が中心で、伝統を重んじながら新鮮味のある造形や焼成を追求。近年では酸化と還元の二度焼きにより、一つの作品に異なる表情を見せる壺などを手掛ける。

こにし とうぞう

備前焼の製作技術 小西 陶藏

市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



昭和 22 年 (1947) 生まれ。2 代目小西陶古の長男。

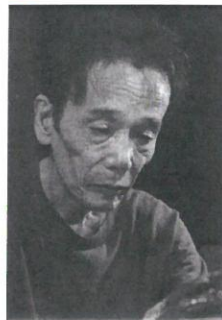
茶陶などの伝統的な作陶のほか、近年では曲線状あるいは鋭角状の刻文が入ったオブジェ風の斬新な花器や鉢にも挑戦し、備前焼に新風を吹き込んでいる。

かわばた ふみお
備前焼の製作技術 川端 文男
市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



昭和 23 年（1948）生まれ。
主に手びねりや紐作りで自由な造形を目指す。近年では、原土に含まれる鉄分等を土肌の表情として生かす「自然練り込み」の技法で花器や大皿を手掛ける。また穴窯での焼成により、グラデーションを表現することに成功する。

かねしげ ゆうほう
備前焼の製作技術 金重有邦
市 平成 25 年 10 月 25 日 備前市伊部



昭和 25 年（1950）生まれ。金重素山の三男で金重陶陽の甥。
茶碗・水指・花入などの茶陶を中心に手掛ける。近年では山土を使用し、素朴で豊かな土味を極限まで引き出すことに力を注ぐ。山土焼成専用の窯を築くなど、伝統本流の立場から備前焼の可能性に挑戦している。

もくぞうじゅういちめんかんのんぼさつりゅうぞう
木造十一面観音菩薩立像
県 平成 27 年 3 月 6 日 備前市蕃山（千手院）



檜の一本割刳造で和様代用檀材を用いた檀像。全体的に柔和な表現がみられることから製作年代は平安時代後期と考えられ、天冠台の構成から十二世紀後半の可能性が指摘されている。

図上面の化仏、左手首先、右手の手甲部、天衣遊離部、足首、持物、台座、光背等が後補だが、全体に保存状態が良く貴重である。
＜御本尊・非公開＞

もくぞう あ み だ によらいりゅうぞう
木造阿弥陀如来立像
市 平成 29 年 1 月 24 日 備前市蕃山（千手院）



檜の一本割刳造で、制作年代は平安時代後期とみられる。正楽寺本堂中央の向かって右に安置されているが、もともとは、持物堂の本尊と伝えられる。

彫眼であり、体部の奥行きが少なく、衲衣の衣文の表現も浅く穏やかである。

＝指定文化財等件数＝ H29 年 4 月 1 日時点

			国	県	市	計
有形文化財	建造物	建造物	7	3	13	23
		石造美術			7	7
	美術工芸品	絵画		2	4	6
		彫刻	1	3	2	6
		工芸品		6	6	12
		書籍・典籍	1		3	4
		古文書			1	1
		考古資料			1	1
		歴史資料		1	5	6
記念物	史跡		4	2	22	28
	名勝				3	3
	天然記念物			1	8	9
無形文化財(保持者数)			1(1)	1(6)	1(9)	3(16)
民俗文化財(無形)				1	4	5
指定文化財 計			14	20	80	114

登録有形文化財	2			2
---------	---	--	--	---